

伝えたい ヒロシマを

<下>

ぼうと決心した。昨年4月から、広島平和記念資料館の「ピースボラニア」として、世界中から訪れる人たちに月2、3回の頻度で資料の説明や慰霊碑の案内をしている。60代、70代が目立つボランティアの中で30代は少ない。「自分がボランティアをしていて、同世代が生まれている。市は被爆の若者が『ヒロシマ』に興味が残すため、伝承

若者が関心持って ガイドを務め責任感強く

つなぐ

ボランティアガイドとしていつも訪れている広島市中区の平和記念公園は6日、鎮魂の思いに満ちていた。原爆の恐ろしさや平和な日常の大切さを若い世代に伝えている渡辺裕子さん(31)は、広島市出身2回目。犠牲者を悼む人並みの中で、原爆死没者慰霊碑と供養塔に静かに手を合わせた。

8月6日に生まれた。誕生日が広島に原爆が落とされた日だと知った小学生のときから、原爆について考えてきた。

広島に移り住むことまでは考えなかったが、2年前に英語を学ぶために行ったフィリピンで転機が訪れた。現地の知人らに原爆を



争に至るまでの歴史や、日本の加害なども学ばなければいけない」と感じた。広島で暮らしながら原爆を学ぼうと決心した。昨年4月から、広島平和記念資料館の「ピースボラニア」として、世界中から訪れる人たちに月2、3回の頻度で資料の説明や慰霊碑の案内をしている。60代、70代が目立つボランティアの中で30代は少ない。「自分がボランティアをしていて、同世代が生まれている。市は被爆の若者が『ヒロシマ』に興味が残すため、伝承



平和記念公園で親子連れを案内する渡辺裕子さん(右)「当たり前を感じる平和な日常を大切にする気持ちを伝えていきたい」と話す＝2日、広島市中区

味を持つきっかけになれば、者の養成事業を始めた。3年間の研修を終えた50人が、4月から平和記念資料館なるとは、被爆者の高齢化と記憶の風化だ。被爆者の平均年齢は今年初めて80歳を超えた。「被爆体験を語る活動や被爆者の証言映像の制作に取り組む。2年とができる人が少なくなっていることに危機感がある並川桃夏さん(17)は、「被爆が願っていた世界を」と話す渡辺さんは、体爆した体験者から直接話

「私が勉強して説明して、私たちが語る経験には残す責任がある」と強調すること身近な人から関心する。渡辺さんは今月上旬、親子連れらを平和記念公園に案内した。70年間、被爆者が願っていた世界を、柳香葉子が担当しました